

万博第2部(美術)会場での陳列写真。「四時ノ名勝」は実際には各一面ずつ離され、部屋の隅に飾られていたことがこれらの写真に示されている。(いずれも農商務省編『千九百年巴里万国博覧会臨時博覧会事務局報告』明治35年より)

下段右より4点目は「四時ノ名勝」のうち「碓氷峠錦楓」である。

下段左より2点目は「四時ノ名勝」のうち「寢覚新緑」である。

2 川端玉章 かわはたぎよしくしやう 明治二十九年帝室技芸員任命

《四時ノ名勝》 四面

明治三十二年(一八九九)

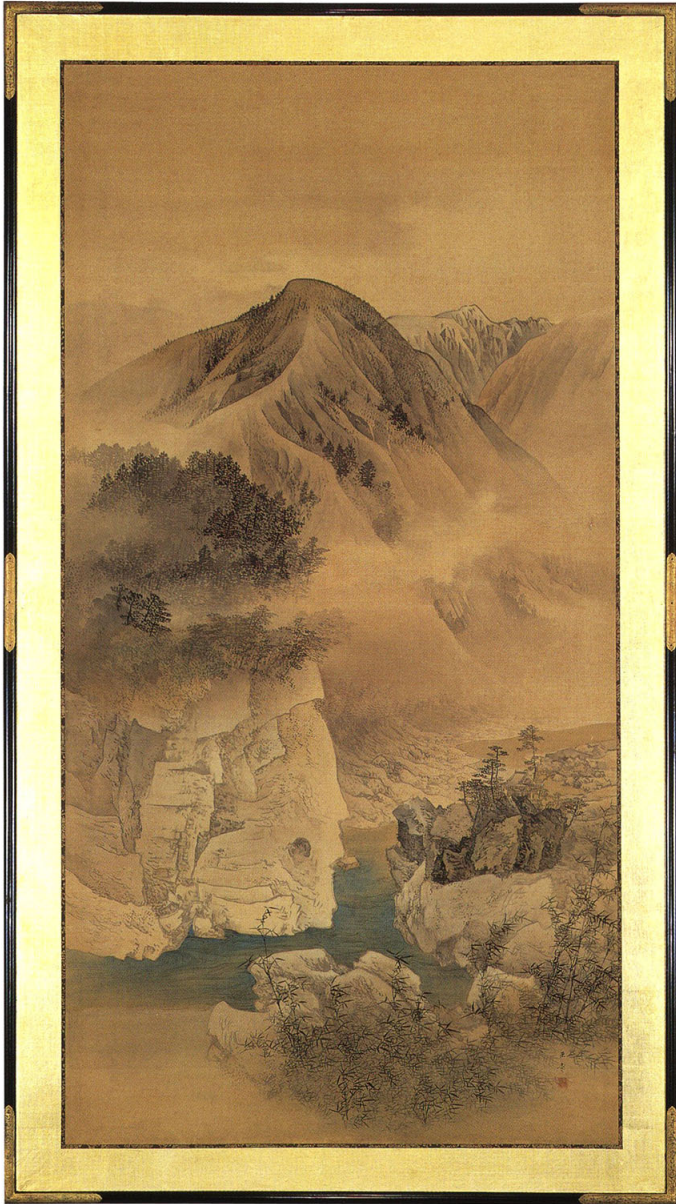
絹本着色

本紙各一六六・四×八四・九

パリ万国博覧会出品作の御下命を受けた川端玉章(一八四二〜一九一三)は、春夏秋冬の日本の景勝地「吉野花雲(奈良・吉野山)」「寢覚新緑」(長野・寢覚の床)「碓氷峠錦楓(群馬・碓氷峠)」「厳島密雪(広島・厳島神社)」の四面を描いた。

当初、宮内省側から万博出品作として額もしくは屏風の制作を命じられた玉章は、屏風形式を構想して制作を進めた。玉章が明治三十年(一八九七)十月に宮内省へ提出した仕様書によると、四枚折屏風の表に「四時ノ名勝」の各面を配し、その腰下には四季の虫や草花、裏面には千鳥図、腰下に波濤図を描くという形式であった。しかし、同三十二年九月には臨時博覧会事務局から、屏風形式では出品が認められないとのフランス側の意向が伝えられ、玉章はこれを計四面の額装形式という現状の形に改めている。また上記の仕様書に、玉章は「極彩色金泥引密画」と記しているが、たしかに本図の画面には薄く金泥が刷かれ、また細部にまで神経が行き届いた描写は「密画」とするにふさわしい。彩色にしても、それぞれの季節の情緒を示す効果的な色遣いがなされている。

一面ずつに注目してみると、「吉野花雲」は前景に配された桜の胡粉、その幹や土坡の緑青そして遠景の山肌足された朱が画面に華やかさを添えている。また前景の土坡が墨線で明確に描出されているのに対し、中景は淡くぼかされ、遠近感とともにあたりに立ちこめる春霞



寝覚新緑



吉野花雲

までも感じ取ることができる。「寝覚新緑」は、白い花崗岩の溪谷に映える清流が、ごく薄く伸びやかに賦された群青で鮮やかに表現されている。その構図は、近景から遠景までが自然なつながりを見せ、やや上方から実際はその景色を俯瞰しているような奥行きを見る者に感じさせる。「碓氷峠錦楓」は、紅葉した木々を彩り豊かに描き明るい色調に仕上げられており、また遠景の山の木々一本一本を描くことで、遙か遠くまで視界の通る澄んだ秋空を表している。「厳島密雪」は墨色を基調とし、雪景色の白は塗り残した地色で表現する。また白と黒との明快なコントラストによって凛とした空気感までも演出している。

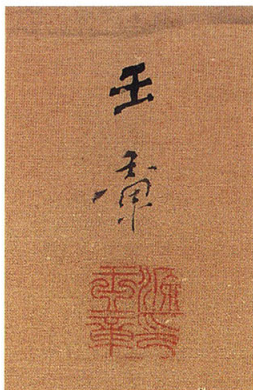
本図制作中(明治三十一年)の談話の中で、玉章は「今の少い先生方は兎角写生かぶれで、西洋画の真似が好きなのが多い」(『川端玉章翁を訪ふ』『太陽』四巻六号、明治三十一年三月)と嘆き、日本画の衰退を危惧している。パリ万博に臨んで玉章が本図で試みたのは、伝統的な日本画の描法と洋画の技法のどちらも取り入れた上で、日本画によってここまで優れた風景表現ができると示すことだったのである。この玉章の意図に共感したのか、本図は臨時博覧会事務局が行った鑑査会においても、「日本画で巴里に持って往きたいものと言ったら、玉章の秋に冬だ」(『美術評論』二二号、明治三十二年九月)と声が上がするなど非常に高い評価を得たことが知られる。結果的に、玉章は本図の他に「水墨桜の山水」「春景山水」を出品し、銀牌を受賞した。



厳島密雪



碓氷峠錦楓





「巖島密雪」部分

- ・各展覧会図録中，作品名や作者，制作年などの表記は，図録発行当時のものです。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録の著作権はすべて宮内庁に属し，本ファイルを改変，再配布するなどの行為は有償・無償を問わずできません。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録（PDF ファイル）に掲載された文章や図版を利用する場合は，書籍と同様に出版・放送・ウェブサイト・研究資料などに使用する場合は，宮内庁ホームページに記載している「三の丸尚蔵館収蔵作品等の写真使用について」のとおり手続きを行ってください。なお，図版を営利目的の販売品や広告，また個人的な目的等で使用することはできません。

皇室技芸員と一九〇〇年パリ万国博覧会

三の丸尚蔵館展覧会図録 No. 47

編集 宮内庁三の丸尚蔵館

制作 株式会社東京美術

翻訳 横溝廣子

発行 宮内庁

平成二十年七月十九日発行

© 2008 The Museum of the Imperial Collections